

都立

産技大

で学び直して

起業

する

る。

。

修了生たちのキャリアデザイン

STARTUP

起業



# 産技大で学び直して

# 起業する。

産業技術大学院大学で学んだ修了生には起業家が数多くいます。

皆さんに共通するのは「本気の学び直し」を求めたことです。

プロフェッショナル達が更なる飛躍に向かって本気で学び直す場所を探し、産技大に集い、学び、新しいステージを歩んでいます。

この人たちが何を学び、それをどう役立てているのか、起業したタイミングを3つのジャンルに分けて紹介します。

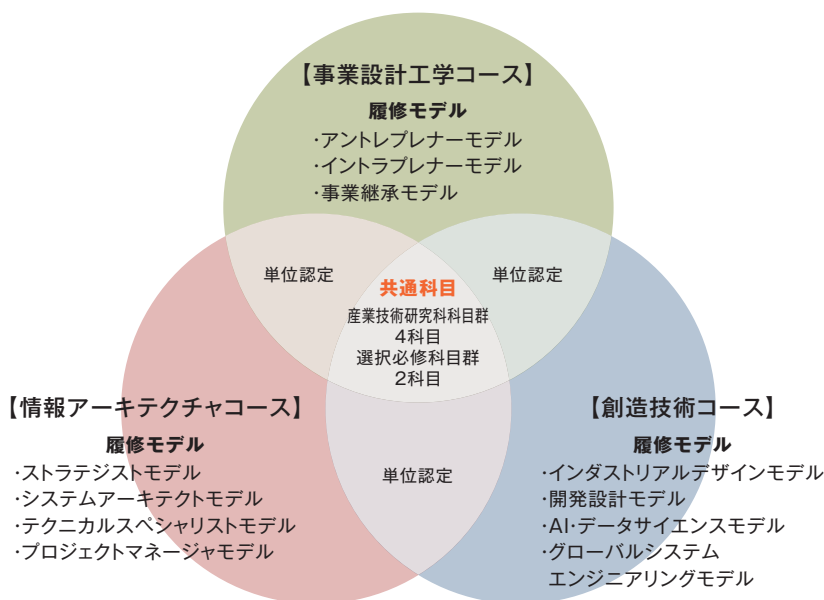
小さな冊子ですが、

産技大で「本気の学び直し」をした人たちのおはなしの中に

あなたがいつか「起業」するときのロールモデルが見つかることでしょう。

2020年度より、産業技術大学院大学は、1専攻3コースにて新しく生まれかわります。

## 新専攻履修モデル





株式会社 東京リテラシー 代表取締役社長 井上 匡さん



## AIITでの学びは即日社内に持ち帰る

企業広報の制作会社を経営して、20年が経ちました。この期間、業界での存在価値を維持できたのは、社会の変化に先んじた手当てを怠らなかったためと自負しています。広報のメディアが、新聞や雑誌の紙媒体からインターネットに移行する際も、一早くWebコンテンツの制作を事業に取り込みました。その後、社会のコミュニケーションは日進月歩のICTに先導されます。しかも、最先端のテクノロジーでさえ数年後には更新され、もはや現場の経験が仕事上の資産になりません。経験則に頼る社会変化の先読みに限界を感じた私が、AIITの門を叩いたのは2012年。体系的な知見に基づき時代を先読みする“ナビゲーションシステム”を頭の中に構築することが目的でした。

AIITで学んだことはその日のうちに会社に持ち帰り、社内で共有しました。学びを実務につなぐ取り組みは、2度目の学び直しでも継続しています。

## ICT環境の変化を先取りし2度目の学び直し

再びAIITの学生になったのは、修了

から3年後のことです。すでに自社の業務は、Webコミュニケーションやモバイルコンテンツの制作にシフトしていました。その中で特に顕著な進展を見せたのが、モバイルの分野。スマートフォンの普及に伴い、情報発信の主体は個人に移行し、この流れがさらに強まることは間違いありません。

Webを介した企業のコミュニケーションも、相手をマスで捉えているばかりでは通用しなくなるでしょう。特定できる個人の属性や行動の履歴、そして個人の体験価値のコンテキストに基づく情報設計が求められる時代に、最も体系的に整理されていると私が着目した理論がUXD(User Experience Design)。その手法を自社のコンテンツ制作に取り込むため、あらためて半年間、AIITの講義を受講したのです。

UXDはプロダクトの世界でも注目度が高く、AIITの講座には受講希望者が殺到。ネットによる受講申し込みは、秒単位で定員を満ちます。5Gによる通信が本格的に運用される前に、UXDの手法を社内に定着させたかった私は、受講を確実にするため、超高速接続サービスを利用できるプロバイダーに、会社の契約を変えたほどです。

その甲斐があって再びAIITに学んだ私は前回と同様、UXDに関する知見を

その都度、会社に持ち帰りました。かつて紙媒体からインターネットへの転換を経験しているスタッフは、情報設計の新たな手法も飲み込みが速く、私が受講を終えるのとほぼ同時期に、自社のWebサイトをUXDの考え方を活用してつくり替えることができました。

## 企業価値を保ち続けるために変化を前提とする覚悟を

会社を興す人は誰でも、既存にない視点や技術に対する自信と夢を持っていると思います。それが起業の原動力になるのですが、会社を継続・発展させるためには、一番大切なものだけを残し、事業を根底からでも変える覚悟が必要だと考えます。私の場合、コンテンツの制作会社であり続けることだけは貫き、それ以外は創業時の姿を一新したといえます。その変化の方向性を示唆してくれたのが、AIITでの学び直しと、学びを通してつながった人的ネットワークであると確信しています。

起業には、夢が必要。  
継続には、変化が不可欠

創造技術専攻 2015年修了  
横浜市立大学 出身



## 「IT=理系」の思い込みから解放され 文系的アプローチの重要性を発見

情報アーキテクチャ専攻 2014年修了  
成蹊大学 出身

### IT業界への転職を経て 仲間と共に起業

システム開発のコンサルティング会社を経営する傍ら、大学で起業家教育の講義を担当しています。

新卒で入社したのは、オフィス機器の専門商社でした。職場の仕事環境を整えていく中でITシステムに関心を持ち、転職した先が設計ツールのベンダーです。しかしプログラミングの知識がないまま、十分に理解していない商品売ること疑問を感じ、開発会社に移籍。実務の中でプログラミングを学んだ2年後、友人に誘われ現在の会社を立ち上げました。

起業した会社では、営業から設計・プログラミング、納品して運用するまでを担当しました。分業により担当する仕事の前後が不案内になることに疑問を感じていたので、「全部をやる」ことは、望んでいた仕事の形でした。

けれども、会社の仕事は受託開発が中心。案件の企画段階から関わることはありませんでした。また、経営の安定を図るため、手慣れた技術による“負けない試合”を繰り返すことにも行き詰まりを感じ始めました。そこで独学で身につけたプログラミングを学び直し、プロジェクトマネジメントをさらに深く理解して、システム開発の全てを視野に収めたいと考えたことが、AIITに入学した主な理由です。

### 仕事に直結させる学びから 未知を知る経験重視へ

AIITで学んだ収穫を端的に表せば、文系コンプレックスからの解放といえます。経済学部を出て社会人になった後、プログラマーを目指したときから、私は理系的な思考に近づくことに腐心してきました。しかしAIITで学ぶうちに、仕事に活かせることだけを目的にすることが、もったいないと感じ始めます。あらかじめ定めた目的にかなわない学びを切り捨てるのではなく、むしろ未知の分野の経験にこそ価値がある、言い換えれば、学ぶこと自体の価値に気づいたということ。その一つが、授業で学び、PBLで応用した質的調査と分析の手法です。

PBLでは、初心者向けのプログラミング環境を開発。プログラミングの未経験者や初心者がどこでつまずき、どのような操作であれば上達につながるかをヒアリングし、その調査をまとめました。その過程は、システム開発には理系的な思考が求められると考えていた私にとって、文系的なアプローチの重要性に視線を向けるきっかけになりました。

### 在学中に事業を転換し コンサルティング会社に

奇しくもビジネスの現場では、データ至上主義やロジカルシンキングだけでは立ちゆかないという風潮がでてきました。こうした経験や背景から、在学中に自社の事業を転換。受託開発の件数を減らし、現在はシステム開発や新規事業開発のコンサルティングを主な事業としています。

決して急成長を遂げる事業ではありません。一般に「起業」というと、新規性を武器に急成長を遂げるスタートアップ企業のイメージが強いですが、世の中には自分たちの強みを活かして着実に仕事を続ける企業もたくさんあります。私はそういう起業家が増えていけばいいと思っています。



ワイクル 株式会社 代表 角 征典さん

東京工業大学 特任講師



株式会社 Blueship 代表取締役 慶松 大海さん



## IoT時代の到来を前に モノづくりの世界を学ぶ

会社を興して10年、企業で稼働するシステムの構成や変更の管理を得意として成長してきました。しかしITの世界は変化が激しく、経営者である私は社会の少し先を考え、新たな事業を模索しなければなりません。すでにインターネットが社会の隅々までいき渡り、モノとモノとのネットワーク化がいわゆるようになっていました。

当社は専らソフトウェアという形のないものを扱ってきたため、モノづくりの知識や経験を持っていません。IoTの時代が本格的に到来する前にモノづくりの知見を得ておきたいと思ったことが、AIITに入学したきっかけです。

インターネットにつながるデバイスはもちろん、世の中で広く愛用されるモノがいかにつくられるかという工程や、多くの人の目を惹くデザインが完成するまでにどのような思考過程を経るものかを理解し、モノやデザインの良し悪しを判断する体系的な基準をAIITで身につけたかったです。経営者はアイデアを絶やさないことが肝心。未経験の分野を学ぶことで事業展開のヒントを得たり、いわゆる引き出しを増やしたりすることがねらいでした。

## 学業の時間を確保し 仕事をスケジュールリング

入学後は、通学と受講にかかる時間を確保した上で、仕事をスケジュールリングしました。インダストリアル・デザイン系の科目や品質工学など、入学前から学びたいと考えていた授業や、個人的に関心があったグローバル系の授業などを一通り受講しました。

普段から多い出張と重なったときはビデオ授業を活用し、まわりに遅れないよう努めました。PBLには、Webカメラによるテレビ会議で参加することもありました。膝をつき合わせての議論への参加は限られましたが、遠く離れている者同士のカメラを介した同一体験は、PBLの実証実験につながります。

PBLでは、観光地に足を運ぶことなく、旅行気分を体験できる遠隔Webサービスを開発しました。指導教員から与えられたのは、サービス工学を活用するという課題のみ。一緒に取り組む地方出身の学生や留学生が抱く、遠くの故郷や家族とつながりたいという身近な思いを汎用化した結果、テーマを観光にしました。PBLと並行して、私は会社の沖縄プロジェクトを進めていました。沖縄に出張した際は、那覇市内の各所をカメラで撮影。他のメン

バーは、その映像をリアルタイムに観て、開発するシステムの使い勝手や臨場感を検証したのです。

## 仕事の世界を越えた 人的ネットワーク

当社の沖縄プロジェクトは、特産の泡盛をカクテルのベースとしてヨーロッパ市場に浸透させようというものです。市場開拓にICTを活用することはもちろん、泡盛というモノを扱うにあたって海外のブランディングチームと連携し、ボトルもラベルも一新しました。

試作の評価には、AIITで共に学んだデザイナーからのアドバイスも参考にしました。異分野のプロから気軽に意見を聞けるのは、ITの世界にとどまっていた、AIITに入学する前であれば考えられません。幅広い分野に人的ネットワークを広げられたことは、AIITで学んだ最大の財産といえます。

## 社会が変わる方向性を見定め 新事業のヒントを探る経営者の学び

創造技術専攻 2016年修了  
育英工業高等専門学校(現・サレジオ工業高等専門学校)出身



## デザインの領域拡大をねらい学び直し 作風を一変させる

創造技術専攻 2014年修了  
多摩美術大学 出身

### 震災を機に実績を振り返り 今後を考え直す

AIITに入学する前と修了後で、インテリアデザイナーとしてのポートフォリオは一変しました。

インテリアデザインの世界は企業で組織的に働くことが潮流となり、フリーランスとしての実質個人での仕事は限られます。それでも独立して以降、仕事が途絶えることはありませんでした。転機は2011年の東日本大震災です。当時建設工事が延期や中断で減少。私も増えた空き時間で、それまでの仕事を見直すとともに今後に思いを巡らせ、デザインの学び直しを考えるようになりました。

AIITを学び直しの場としたのは、ここがプロダクトのデザインを強みとしていたから。インテリアデザイナーとしてキャリアを積んできた私ですが、空間や場づくりへのデザインアプローチに偏りを感じていました。また、デザイン

する空間は、常にオーダーメイド。クライアントも物件のオーナーなど特定の人です。これに対しプロダクトデザインは、大量生産を前提とした、不特定多数のユーザーから対象を特定するなど、私にはインテリアデザインの対極に位置づけられました。一方で空間を構成する床、壁、天井の素材や設備、家具などはプロダクトの世界でつくられたものが大半。そのためプロダクトデザインを学び、デザインの領域を広げることをねらい、科目等履修生を経てAIITに正規入学したのは2012年。40歳を迎える年のことでした。

### デザインという行為の 根本を追求する

AIITでは、多様な知識や新規の視点を獲得しました。例えばそれは、美術大学生だった頃は体系化された理論が日本ではマイナーだった、デザイン思考であったり、デザイン行為にイノベーションを起こす発想であったり。想定する数十年先のありたい姿から逆算し、数年先や現在のあるべきデザインを提案するなどの考え方を学びました。その姿勢を仕事にも反映させ、「いま、なぜこのデザインか」を客観的な視点で言語化し、根拠をもってクライアントに説

明できるようになりました。

また、港区芝の商店街をデザインの中で活性化させるPBLは、誰のため、何のためにデザインするかを深く追求するきっかけとなりました。学びの収穫を日々実感し、即仕事に取り込むうちに学びと仕事との境界が薄れ、いつしか教室や夢工房<sup>※</sup>でも仕事のプロジェクトに見立てながら学ぶ時間が増えていました。

### 不可分となった AIITと仕事

人との出会いも、AIITで得た貴重な財産です。修了生の有志で結成したチームでプロダクトデザインした作品が、ロシアのデザインコンペで入賞を果たしたのも、AIITで学んだからこそそのつながりと経験です。さらに、授賞式で知己を得たロシアのデザイナーとはその後、仕事を協働するなどの交流が続いています。

既製品を使って空間を埋めるだけでは飽き足らなくなった私は、内装材や家具のデザインや製作、施工工事でも自分の手を動かすようになり、新たなユニークな作風が評価されるように。夢工房<sup>※</sup>での試作品の製作経験は現在も活かされており、私の仕事とAIITはいまも不可分といえます。

※夢工房(東京夢工房)…大型モニター等が設置されたミーティングスペースと、3Dプリンター、レーザー加工機等が設置されたワークスペース。



アールエヌエー 代表・デザイナー 鈴木 一彰さん

## 学んだことや経験は 学位や資格という形にする

社会に出て10年を過ぎて以降、働きながら学び続けています。

大学では機械工学を専攻しましたが、新卒で就いたのは法律に関わる仕事でした。就職して10年は仕事だけに専念。その間に身につけた法律の知識を整理するため、母校の通信教育課程に設置された法学部で学んだことが社会人学生としての始まりです。

AiITに入学したのは、社会人になって23年目のこと。それまでにも行政書士の資格を取得し、勤務先の許可を得て個人事業主として届け出ています。

学んだことは、学位や資格という形にすることを信条としています。勤続や経験の年数だけでは、仕事人としての価値を表すのに十分なアピールポイントにならないことを、仕事の中で目の当たりにしてきたためです。

AiITで学んだのも、技術コンサルタントとして独り立ちする上で「創造技術修士(専門職)」の学位を取得し、ものづくりに関する専門的な知識を体系的に修得した証とすることが、理由の一つとしてあげられます。さらに学位以上に重要だったのは、ものづくりの背景となる、新奇な発想の技法や効率的な生

産工程の設計、そして構築の過程を理解することでした。

## ものづくりの背景となる 発想や生産の知見を増やす

私が目指す技術コンサルティングは、会社の応接室で担当者と向き合い、話をするものではありません。開発や生産の現場に技術者と立ち、独自性に富み、より良い知財となる製品を共に考えることです。会社の機密に関わりますから、強固な信頼関係が求められます。その前提となるのが、顧客の利につながるコンサルタントならではの視点や現場の人間が持ち得ない広範な知識である考え、それらを修得することが、AiITで学ぶ第一の目的でした。

在学中に受講した科目は、どれも入学前の期待に違わぬ内容だったといえます。例えば創造設計特論では、発想のプロセスを学びました。設計工学特論ではメーカーが採用する設計の定石について、信頼性工学特論では製品の品質を保証する各種のパラメータについて理解できました。いずれも製品として世に出る前段階に関する知見であり、ものづくりの現場をリアルに思い描くことができました。そして、実際のものづくりはPBLで体験します。

私たちが取り組んだPBLは、人の体に貼りつけたセンサーで取った心拍数から気分や精神状態を解析し、その結果を光で表すデバイスの開発でした。チームの中で回路の製作を担当した私は、連日のように夢工房<sup>\*</sup>に籠もりました。電子工作は実に30年ぶり。ハンダごてを握る手にも力が入りました。

## 通学して学ぶから出会える 起業を目指す仲間

社会人になってからも学び続けてきた私ですが、実は通学して学んだのは大学以来のこと。そこには通信制にはない出会いがありました。AiITで学ぶ社会人学生には起業を目指す人も多く、修了後も法律や申請に関する相談に応えることがしばしばあります。もちろんそれは、友人としての対応。私が目指す技術コンサルタントに相応しい知識を求め、今後も“学び直し”ならぬ“学び続け”に取り組みます。

\*夢工房(東京夢工房)…大型モニター等が設置されたミーティングスペースと、3Dプリンター、レーザー加工機等が設置されたワークスペース。

## 仕事人としての価値の向上を目指し 社会人学生として学び続ける

創造技術専攻 2016年修了  
慶應義塾大学 出身

## 未知の世界に分け入る 学ぶこと自体が目的

創造技術専攻 2011年修了  
関西大学 出身

### 仕事に直結しない学びをあえて選択する

ライターとして独立して20年ほどキャリアを積んだ頃、AIITの創造技術専攻で学びました。ITを専門領域としていたため、情報アーキテクチャ専攻の方が仕事に役立つのではないかとわかれたものですが、私の考えは違っていました。かつて創造技術専攻を取材したことがあり、デザイン教育と工学を融合させたユニークなカリキュラムに驚きました。正直に言えば、ここからどんな人材が生まれるのか想像できませんでしたが、私にはその「分からない感じ」がよかったのです。

リマンショック後、フリーランスの仕事は減るだろうと予想し、空く時間を利用して学校に通おうと考えたことが、学び直しのきっかけ。当初から仕事に通ずることを学びたいとは考えていません。むしろ、未知の分野に足を踏

み入れることに期待感がありました。要するに、学ぶこと自体が目的。ただし、高い成績を収めることには力を注ぎました。将来、留学を考えたとき、学業の成果を表す数値が重要な意味を持つからです。

### 実社会では経験できない 集団の一員になる

入学してみたら懸念した仕事の減りはなく、社会人学生になった分だけ忙しさは増してしまいました。それでも時間をやり繰りして学んだ2年間で、その後の生活や仕事に活きる様々なものを手に入れることができました。

一つは、プロジェクトをチームで完遂させる経験です。AIITでは授業の中で、計画立案から成果発表まで、メンバーが膝をつき合わせて議論しながらプロジェクトを進めます。2年次のPBLがその代表ですが、AIITでは1年次の講義にも「スモールPBL」と呼べるような、プロジェクトを通した学びが設定されていました。

会社勤めをしていれば、そうした経験があるでしょう。しかし、社内のチームは上司や部下など、あらかじめ地位や役割が決まっています。ところがAIITで組むチームは、ベテランの企業人と

孫ほど歳の離れた新卒の若者が、学生としてフラットな関係を築きます。社会人同士でも多様性が高いため、コミュニケーション力が鍛えられます。実社会ではなかなか経験できない、そうした集団での交流機会を大切にしようと、私は学外でも催しを企画して熱心に周囲を誘いました。

### 働きながら学ぶ習慣がつか 社会人学生を継続

修士課程ならではの経験としては、海外で研究論文を発表したことが挙げられます。熟練工の技を科学的に分析したPBLの成果を論文にまとめたところ、英訳すれば学会で発表できるかも、と促されました。これもまたとないチャンスと思い、四苦八苦しながら英語の論文を書きあげた結果、ハンガリーで開かれた学会でそれを発表する貴重な機会を得られたのでした。

そうした数ある経験の中で、最も価値ある財産になったのは、仕事をしながら学ぶ習慣が身についたこと。その習慣を捨てまいと、AIIT修了後、関心のあった言語学の講座を国立大学で受講。世界に約7,000あるとされる言語をできる限り学ぶという壮大な目標を立て、社会人学生を続けています。



フリーランスライター 吉田 育代さん





## 豊富な専門知識に憧れ ITを初めて学校で学ぶ

中学生の頃に覚えてから続けてきたプログラミングが、大学卒業後の仕事になりました。AIITに入学したときは個人事業主の立場でシステム開発会社に常駐。その職場で目に止まったのが、フルスタックエンジニアの仕事ぶりです。学部、大学院とも情報を専攻してきたそうです。その豊富な知識と広範な対応を間近で見たからこそ、技術を専門的に学ぼうと思いました。

また、個人事業主を卒業し、法人化したいという漠然とした思いも併せ持っていました。それが具体化したのは、科目等履修生として受講したスタートアップに関する授業で、起業のプロセスを学んだからです。プログラマーとしての腕を上げたいという思いに、起業という目的が加わり、私はAIITに正規入学することを決め、受験対策に取り組みました。

## 仕事と学業の 両立生活

夏の入試の課題は、小論文と面接。対策といっても小論文の書き方に関する本に目を通し、IT関連の時事用

語を意識したくらい。入試の難易度は高くなかった印象です。私は合格後入学までの間に、科目等履修生として授業を2科目ほど取ったので、入学後の仕事と学業の予行練習をすることができました。たった2科目でも生活はとも変わりました。自分は何に時間を費やしたいのかを考え、1日の中で削れるところは少しでも削ることをお勧めします。

入学後は、技術系の科目を中心に履修しました。法人化しても、それまでの仕事を継続させるので、技術者としてのスキルアップにつながる授業に注力しました。

仕事は専らソーシャルゲームやマッチングアプリなどコンシューマ向けのサービスのサーバーサイドの開発に携わっています。授業で仕事に直結したのは、アジャイル開発手法です。用語ばかりが先行し、人によって定義がまちまちなアジャイルを学問として学んだことで、上手くまわらない現場の要因が明らかになり、仕事から曖昧さを払拭できました。

またPBLでは、今まで使ったことのないUnityで、レストランでの稼働を想定するロボットの導入シミュレーターを開発する経験もできました。これは、今後の仕事で活かすことができると期

待っています。

## 企業や一般の大学と異なる AIITのコミュニティ

企業では価値観を共有する人が一緒に働き、大学までの学校は同世代が大半です。AIITはそのどちらとも違う、さまざまな背景を持つ人が共に学んでいます。こうした環境はあまりないと感じ、在学中にできるだけ多くの人と接しようと心がけました。学長にも面会を申し込み、会って話しました。そんな学生はあまりいないのか、興味を持ってもらえたようで快く面会に応じてくださいました。

在学中に起業して以降も、私の仕事は変わりません。しかし、看板を背負ったことでの責任と張り合いが増したことで、以前より前向きに、そして楽しく仕事しています。

## 技術者としてのスキルアップと 個人事業主の法人化を目的に学ぶ

情報アーキテクチャ専攻 2019年修了  
駒澤大学 出身



## 理念・ビジョンを確立し 入学1年後に起業を実現

創造技術専攻 2016年修了  
神戸大学出身

### 将来の起業を想定し 技術を学び直すために入学

テクノロジーを核とした会社の起業を念頭に置き、AIITに入学しました。

機械メーカーのエンジニアとして社会でのキャリアをスタートさせたものの、総合商社に転職後は海外事業の営業職に従事したため、その間約8年のブランクを埋め、テクノロジーの最先端をキャッチアップするためです。

入学は2014年10月。その年の暮れに会社を退職しました。当初はAIIT修了後に会社設立の予定でしたが、入学からちょうど1年後の2015年10月に株式会社テクニコルを設立します。私の想定を早めて、起業の夢を実現することができました。

### 授業やPBLを通じ 基礎技術を習得

現在は株式会社ROXと改称し、事業



株式会社 ROX 代表取締役 中川 達生さん

を発展継続させています。

ROXは、ビッグデータの解析、AIの開発やAIに関する研修サービスの提供、およびメンタルヘルスサービスを主な事業としています。

特にAI開発では、需要予測アプリケーション「AI-Hawk-」が人気を得ています。「明日は店舗に何人お客が来るだろう?」「この商品は来週何個売れるだろう?」といった悩みを解決するお役に立てるアプリです。

店舗を構える経営者や店長はこういった“予測”にまつわる悩みを常に抱えています。これまでは勘や経験に頼るしかなかった客数や販売数の予測をAIが行い、店長の作業負担を軽減して、労働時間を短縮します。飲食店では来店客数予測によりスタッフのシフト作成を合理化し、人件費削減になったとの成果も出ています。適用範囲は飲食に限らず、ある法人では弊社AIによってスタッフの残業時間を平均10時間減らすことができました。このような成果により、最近では大手のファミリーレストランやベーカリー、生菓子を扱う店舗などで特に利用者を増やしています。

ROXで展開する技術の基礎は、AIITの授業やPBL活動で培われた部分も大きいです。想定よりも早い起業を実現

できたのは、PBLでの私の役割がデータ解析であったこともあるでしょう。PBL活動が私の技術力向上につながったといえます。また、PBLや授業で経験豊富な先生方と議論を交わしたことにより、気づけば高いレベルの実践的な技術を身につけていたように思います。さらに国内外での論文発表を積極的に行ったことも、技術レベルの向上になりました。

### 起業後も継続する 教授と仲間とのつながり

公立の大学院には珍しい組織であるAIIT社長会には、入学直後に入会しました。この集まりで会社を運営する先輩方や同年代の経営者と接する中で、貴重なアドバイスをいただいたり、情報交換をしたりできました。

経営者は孤独といわれますが、AIITの同級生とフラットな関係を築けた私は、そのような感覚とは無縁です。修了後も、先生方やPBLの仲間とのつながりは続いており、互いに悩みを気軽に話せましたし、社長会のつながりで実現した仕事もあるなど、有形無形にさまざまなものを得ています。AIITでの出会いは貴重な財産であるとともに、現在進行形の経営資産といえます。



株式会社アイデアハブ 代表取締役 原 孝治さん

不動産会社 情報システム部 勤務

## 独学で身につけた技術を 検証する学び直し

AIITの2年次にPBLから生まれた会社は、設立時から条件付きで活動期間を限定していました。起業した会社を休眠させた後は、組織コンサルティング会社を経て、ITに注力している不動産会社の情報システム部に籍を置いています。

入学時は、印刷会社のシステム部に勤務。原稿の入稿システムや自動組版システム、社内インフラなどを開発・運用していました。プログラマーとシステムエンジニアを兼ねたような業務をこなしていましたが、技術は独学で身につけたもの。果たして自身のプログラミングは正しいのか、正しいとしてもどれくらいのレベルかを検証してみたくなりました。また今後のキャリアを考え、さらに大規模なシステムを構築する際に求められるプロジェクトマネジメントの知識も身につけようと学び直しの場を探しました。

手始めとして、文部科学省が推進する情報技術分野の人材育成事業「enPiT」に応募し、同事業のビジネスアプリケーション分野で連携校となっていたAIITの教室で学びました。その際、“おまけ”として受講できたAIITの授業が、私が求めていた学びと一致し

たことで、正規入学を決めました。

## 起業志向を持つ技術者として バランスに配慮した授業選択

AIITで学ぶにあたっては将来の起業も考え、事業アーキテクトコースを選択しました。履修する授業は、①事業化系、②マネジメント系、③技術系のバランスに配慮して選択。それ以外では、マーケティングの授業に力を注ぎました。講義の中で、大手広告代理店の実務経験を持つ教員が語った「マーケティングとは、製品を商品にすること」という一言はその後も、仕事の質を自問する際の試金石としています。

AIITの授業は、思わぬところで仕事に影響を与えるヒントや知見に出合います。その最たる例が、結果として自身の会社を起業することになるPBLだったといえるでしょう。

## 社会を変えるサービスは 提供者を問わない

私が参加したPBLのテーマは、「サービスをつくる」と、極めてシンプル。協働するメンバーとディスカッションを重ねて選ばれたのが、私が提案した「アイデアハブ」でした。

このサービスは、アイデアの創出をサポートし、公開できるものはシェアし、アイデアを探していたり、それを実行に移せたりする人や組織が活用できるというもの。事業アーキテクトコースで学ぶ私は、そのシステムを事業化するまでをPBLの到達点とし、これを運用する会社を法人登記したのです。

こうして、学びと並行して起業したのが、サービス名をそのまま社名に採用した会社です。1年間とはいえ会社を動かしたことで明らかになった経営者として足りない点を、現在は働きながら学んでいるところ。また技術については、AIITでの学びからその裏づけができました。自信を得たことで、世の中にインパクトを与えるサービスを提供するのに、企業の従業員が起業家かは重要ではないと思うようになりました。もちろん、起業した会社も眠っているだけ。いまは未経験だった分野で実績を積み、タイミングを見計らい再び旗を掲げる日が来るのを待っています。

## PBLの到達点を起業に定め 学びと並行して会社を立ち上げる

情報アーキテクチャ専攻 2017年修了



## アイデアの在庫を授業で増やし 能力開発の課題を解決する

創造技術専攻 2016年修了  
明治大学 出身

### 計画実行が加速し 在学中に起業

AIITへの入学は、将来の起業を想定してのこと。会社を立ち上げるにあたっては、既存でない魅力的なサービスの創出が欠かせません。私はそれまで蓄積した人材開発や組織改革のノウハウをさらに発展させる、新たな知見と独自のスキルをAIITで得ようと考えました。つまり、ここで学ぶ2年間は会社を興す準備期間。事業の具体化は、修了までにじっくり考えるという計画だったのです。しかし入学の1年半後、私はにわかに関心をもちます。思いも寄らぬスピード起業となりました。

振り返ればその予兆を、入学して間もなく感じていたようにも思えます。社会人学生としての心構えさえおぼつかないまま出席したガイダンスの直後から、授業は新鮮な驚きと仕事に直結するヒントに満ちていました。密度の濃い授業は、モチベーションの高い同期

生の強いまなざしと相まって教室に知的な緊張感をもたらします。その雰囲気、起業に向けた私の意欲を研ぎ澄ませていきました。

### 授業を通して 新サービスを構築

感度を高めた私のアンテナは、授業から起業後の事業につながるアイデアを感知します。例えば、統計解析やビッグデータ解析などを学んだ品質工学や信頼性工学の授業です。

人材開発の現場で常に課題とされたのは、評価の基準でした。教育を受けた従業員が、どのような能力をどれくらい伸ばしたか、これを感覚に頼らずに評価し、一目で分かるように表すことが求められていました。長年そうした課題に直面してきた私は、授業で学んだ統計解析の手法を、能力開発の評価・分析に応用したり、人間中心設計などのデザイン手法を人材教育のトレーニングに取り入れたりすることなどを思いつきました。授業は、従来の課題を解決するビジネスのアイデアを、在庫として仕入れる感覚でした。

こうした学びを重ね、私は起業する会社が提供するサービスの特徴を整理していきました。AIITでの学びと、ピ

ジネスモデルの構築が並行して進んでいったのです。また、アカデミックな根拠に基づく実践的な講義は、経験上の感覚を確かなエビデンスで裏づけ、起業の方向性に対する自信を支えてくれました。

### 学びと成果創出を 実現するPBL

現在、当社が人材開発ソリューションとして提供する教育プログラムも、2年次で取り組んだPBLのプロジェクトをもとに構築したものです。

私は、企業の成果創出と人材育成を両立するには、理論・理屈に基づいた教育設計とアクションラーニングが効果的だと考えていました。PBLは、その考えを確信する場となりました。付け加えればPBL自体が、企業で実践すべき学習スタイルそのものであり、私はそれを受講する立場で経験することもできたのです。私が抱き続けた問題意識とPBLでの経験を合わせて生まれた教育プログラムは、いまでも当社が自信を持って提供できる人材開発ソリューションの核となっています。

AIITで巡り会えた教授陣、同期生、学ぶ環境のどれ一つ欠けても、現在の私はあり得ないと考えています。



リープ 株式会社 代表取締役 堀 貴史さん



株式会社いろはソフト 代表取締役 **三浦 幸太郎**さん



## 独学で身につけた技術を体系的に検証する

16歳で教育ソフトのプログラミングを始めて以来、学習・教育システムの開発に取り組んでいます。23歳で会社を興し、日本初のインターネット大学に導入するeラーニングシステムの開発などに携わりましたが、6年後に事業を精算。自身の技術を海外で試したくなり、渡米しました。

その後、機能の高度化だけを追求する開発に限界を感じ、アートの感性を養うためフランスに渡りました。パリのアパートで生活をしながら、人が感じる美しさや心地よさを考え、目指したのはお絵描きをするように使える個人向けの学習支援ソフトでした。帰国後これをリリースすると、多くの雑誌で取り上げられ、50万ダウンロードを記録し、海外でも好評価を得ました。

自身の方向性を確信したものの、これまで身につけた技術は全て独学によるもの。さらに飛躍するため、情報技術を体系的に学び、自分がすでに持つ技術と欠けている技術を検証しようと考えました。また、将来海外で仕事をしようと思った時、ビザの審査でアドバンテージになる学位を取得しておくことも、AIITで学んだ大きな理由でした。

## 市場の空白地帯に戦略的に投入したシステム

改めて立ち上げた会社では、オープンソースソフトウェア(OSS)の学習支援システムの開発及び一般提供を、戦略的なビジネスとして展開しています。OSSに着目したのは、AIITの授業で先駆的な事例を学んだことがきっかけ。また、同じく授業で身につけた市場分析の手法に、かねてより構想していた「オープンで、かつシンプル」というシステム形態を当てはめたところ、そこがほぼ空白であることを発見したのです。

事業化を前提に、PBLでOSSの開発、実証実験を済ませ、そのときにビジネスモデルを立案しました。講義で学んだ理論をPBLで試し、起業した会社のビジネスにした、というわけです。

開発したシステムは、100社以上から問い合わせがあり、そのうち約20社とビジネスを進めています。現在では「オープンソース eラーニング」とGoogleで検索すると、当社のサイトがトップに表示されるまでになりました。

## 究極の目標に近づく重要なエポックとなる学び

現代のソフトウェア開発は、OSS抜き

には語れません。ですから、もしAIITで学んでいなくとも、私は同じようなシステムを開発していたかもしれません。しかし、仮にそうだったとしても、事業戦略に基づいてそれを市場に投入したという点で、現在のビジネスはこれまでとは決定的に違います。

AIITを経てつくりあげた学習支援システムには、そこで学んだ知財戦略の知識や経営感覚も反映されています。単なる思いつきによるヒットではありませんし、受け入れられていなかったとしても、市場投入までに辿った過程を正確にさかのぼって原因を突きとめ、次に活かすことができます。

10代から学習支援ソフトの開発に取り組んできた私の究極の目標は、自ら学び、考え、歩む社会をつくること。AIITで学んだ経験は、世の中に必要とされる学習・教育用システムの開発を通じて、目標の実現に近づく、重要なエポックになるはずだと。

## 講義で学んだ理論をPBLで実証し 起業した会社のビジネスモデルとする

情報アーキテクチャ専攻 2017年修了  
放送大学 出身



## 独立して10期目を迎え AIITを経て新製品を完成

創造技術専攻 2016年修了  
大東文化大学 出身

### 自社製品の開発につながる 知識を求めて学び直し

製品開発に欠かせない物性測定器は、国内外のメーカーがハイエンド化を競い合っています。測定器メーカーで海外事業を担当した経験から、簡単な操作で誰でも使いやすく、現場や用途を選ばないポータブルな測定器の必要性を感じていました。

そうした手軽な物性測定器の開発・販売を目指し、30代前半で独立しました。当初は電源を必要としないアナログの製品を考えましたが、精度を求めればかえって高額に。市場へのアピールも限定されるため、ひとまず個人事業主としての看板を掲げたまま、外資系企業に再就職しました。

そして30代の半ばを過ぎた頃、マイコンやセンサの価格が手頃になり、アイデア実現のハードルが下がってきたことで、改めてデジタル機器での可

能性を探り、プロダクトやアプリケーションの開発に関する知識と技術をAIITの教育に求めました。

### アイデアを具現化し ストックする技術を修得

AIITへの入学は、個人の事業を名実ともに稼働させるための、測定器開発につながる学び直しが目的です。具体的には、プロトタイプ作成と産業材料に関する知識の修得でした。

産業材料は測定対象であり、その特性がアプリケーション開発の前提となります。入学時点でプログラミングは未経験だった私がイチから学び、修了後も継続することにより測定器が測ったデータを解析するアプリケーションをつくりあげるまでになり、マイコンを組み上げる技術も身につけました。

PBLでは、自然界のどこにでもいる珪藻を使った材料開発に挑みました。まずは珪藻を有機物と無機物に分離。私はそのうち無機物のシリカを原料にした樹脂用の難燃性添加物や、超親水塗料になる化合物などをつくりました。化学実験は高校の授業以来。化合物をつくったのは、このときが初めてです。こうしたPBLでの経験はその後、自社製品が使われる現場の理解につながります。

こうした学びがもたらした最大の効果は、アイデアをすぐに具現化できるようになったこと。アイデアをスケッチやメモといった平面の記録や、ましてや頭の中の構想にとどめず、思いついたらマイコンとセンサを組み、プログラムを書いて機能を実験できます。つまり、アイデアを具体的な形にしてストックできるようになったのです。

### 学生の質が支える 学びの効果

2年の就学で、なぜそこまでの学修効果を得られるのか？ それは、実務経験が豊富な教授陣をそろえた教育体制とともに、学生の質もあると思っています。私見では、仕事を通して学んだことは得るものが大きいと考えており、AIITで学ぶ社会人学生とは、その学びを経験した上で、さらに自分を高めようとしている人たちです。しかも授業では、畑違いの人や年齢が異なる人が協働して、プロジェクトの計画から研究発表まで取り組みます。私もその輪に加わり刺激を受け、自社製品の開発に漕ぎつけました。

個人事業主として起業したビジネスが10期目を迎え、ようやく真のスタートを切ります。



表面測定器製作所 代表 小坂 耕平さん



おとっと 株式会社 代表取締役 上村 隆幸さん



## 完璧なマネジメントを 工学的手法に求める

完璧なマネジメント——AIITで学びたかったことは、この一言に尽きます。仕組みや仕掛けなどをことごとく設計したサービスの開発と、自分の意思を隔々にまで行き届かせた経営のための、知識や手法を求めていたのです。

学生時代に事業を興し20代で起業して以来、約30年にわたり会社を経営してきました。時宜を得た商材を見極め、長者番付に名を連ねたこともありましたが、成功したのは国の政策に即した事業ばかり。自身の興味・関心で始めた商売が、満足できる利益を生むことはありませんでした。

政策に誘導されたビジネスは、誰がやっても上手いききます。経営者の才覚でないことは、自覚していました。しかも商材が魅力を失えば、また次を探すことの繰り返しです。その経験から引き際を誤らない目は養われましたが、商材を入れ替えることなく、そのバージョンアップにより自社を成長させるサービスを設計したいという思いが募りました。AIITの門を叩いたのは、その思いを実現するため。これまでの経営者人生で最も大きな課題を乗り越えるにあたり、サービスの設計やマネジメン

トを工学的に考えるAIITの方向性に期待したのです。

## PBLと会社の事業を並行させ 相乗効果を得る

入学して驚きました。AIITで学べるユーザーの笑顔まで設計するマネジメントは、私が考えていた「完璧」よりも徹底していたのです。情報アーキテクチャ専攻のカリキュラムも見て、興味を覚えた授業を受講しました。私が学ぶのは足りない知識を得るためであり、学位の取得が目的ではなかったからです。在学中はもとより、いま振り返っても、AIITでの学びに無駄はなく、同級生との会話にもヒントがあふれていました。

学んだことは、その日のうちに職場に導入しました。なかでもPBLは経営者としての強みを活かし、チームの理解を得た上で、学びとしてのプロジェクトと会社での事業化を並行して進めました。その相乗効果もあり、介護施設の利用者とスタッフの満足度を共に高めるシステムを構築できました。

利用者には廉価でサービスを提供し、スタッフには一般以上の賃金を払えるシステムは、既存の業界からは常識はずれや実現不可能と酷評されましたが、すでに事業化に至っています。

## サービスの設計から 会社の設計へ

AIITを修了して半年後、高齢者が高収入を得て働くサポートをする新会社を立ち上げました。PBLで設計したシステムによる住宅型有料老人ホームをオープンさせた会社からは経営者として退き、投資家として関わっています。

サービス設計とマネジメントを学んだAIITでの2年間を経て、私の関心は経営者や従業員の働く意欲を含め、会社自体を設計することに向きました。新会社も、私が考えた完璧なマネジメントシステムが稼働するまでは、売り上げをゼロとし、システムが動きだし事業が軌道に乗った暁には、経営を後進に任せる計画です。私の喜びは目の前の売り上げではなく、社会が固定されたものとして捉える常識やルールに一石を投じることなのです。

## 既存の常識や社会のルールに 一石を投じるサービスを設計する

創造技術専攻 2017年修了



## 学び直しに費やした時間と費用は 一生ものの財産として返ってくる

創造技術専攻 2015年修了  
音響技術専門学校 出身

### 50歳を人生の節目とし 学位取得と起業に挑む

50歳には修士の学位を取得し、起業しようと考えていました。人生の節目に期した、私なりの決断です。

専門学校を出てから映像制作のポストプロダクションでキャリアを積み、映画やテレビ番組、コンサートやイベントで流す実写とCGや実写同士の合成映像を主に手がけてきました。また、その技術を大学や専門学校で教えており、AIITに入学したときは3校で講師を兼務。修士の学位を求めたのは、教えている学生よりは上位の学位を持っておこうと考えたからです。

AIITを選んだのは、平日の夜間と土曜日に授業が開かれる社会人向けの大学院として以前から注目していたため。しかし、本業と講師で、すでに4足のわらじを履いています。さらに社会人学生という5足目を履くことは可能かを自

問し、まずはAIITに科目等履修生として学びました。半年間通学して、時間のやり繰りは自分次第であることが分かったことで、48歳になる年に正規入学します。同期では最年長でした。

### 失敗事例を多く学び 起業の反面教師とする

入学後は会社の立ち上げや、組織や事業のマネジメントに関する分野を中心に学びました。その中で理解に努めたのは、失敗事例の背景と要因です。事業が上手く進まなかったケースには、会社の規模や業界の特性、社会的な環境を問わず、人のモチベーションなどに関する共通の要因が含まれていると考えたためです。

また、組織を固定して捉えず、新しい風を吹き込ませることの大切さも学びました。それらの知見は、修了後に立ち上げを予定していた会社の組織のために使うもの。実際その多くが、起業した会社の経営に役立っています。

PBLは、東京オリンピック・パラリンピックでの稼働を想定した「おもてなしモビリティ」を考案。近未来的フォルムの車体に様々な情報を映し出す機能を搭載した移動型インフォメーションセンターをデザインし、模型をつくりまし

た。仕事では映像という平面の世界を長年扱ってきたため、在学中しかできないこととしてプロダクトの製作に挑んだのです。一方で車体に表示する映像や成果発表会で投影したビジュアルでは、本業の技術を発揮することもできました。

学ぶために切り捨てたのは、それまで酒の場などで費やしていた時間。それなりに楽しい時間でしたが、使ったお金は返ってきません。その点、学びに使ったお金は、一生なくならならず、その後のキャリアに活かせる財産となって返ってくることを実感しました。

### AIITで受けた実践的教育を 若い世代に提供する

修了した3ヵ月後、3DCGのアニメーター集団となる会社を起業。立ち上げた会社では、実際の映像制作は若いスタッフに委ね、私は制作プロデューサーと経営に専念しています。

大学での講義はいまも複数校を受けもっており、起業後はネットでのオンデマンドセミナーも開催しています。

2019年にはアニメーター育成塾を開く計画。私がAIITで受けた実践的な教育を提供し、即戦力となる映像技術者を育成したいと考えています。



株式会社 オプティカルフォース 代表取締役 須藤 定夢さん

大学講師





澁谷経営コンサルティング 代表 澁谷 宗紀さん



## 経験的に身につけた知識を体系的に再理解する

新卒で社会に出て10年超、システム  
の受託開発に携わってきました。そのノ  
ウハウは全て仕事を通して覚えたもの  
ですから、体系的な知識はありません。  
それでいて担当する仕事は、金融系シ  
ステムの開発という超大型プロジェクト  
ばかり。システムの全貌はもちろん、自  
分の仕事が開発全体のどこに関わって  
いるのかが分かりません。

AIITに求めたのは、システム開発の  
上流を知り開発の全貌を収める視野  
と、下流に至る過程や各工程で求めら  
れる技術を理解することでした。また、  
それにより経験的に身につけた知識を  
体系化するとともに、システム開発にお  
ける自分の役割の明確化も期待しまし  
た。入学の段階でAIITの学びはあくま  
でも会社員として、担当業務のスキル  
アップを図り、仕事の流れをより円滑  
にすることが目的だったのです。

一方で私は将来の独立も想定し、  
AIIT入学に先んじて中小企業診断士の  
資格取得を目指す学びに取り組んでい  
ました。当初は全く別ものとして捉えて  
いた2つの学びだったのですが、それぞ  
れタテ糸とヨコ糸になって、独立後の私  
を支えてくれることとなります。

## ビジョンと実務の溝を埋めた 1.5列目の経験

入学後の私は技術系の科目よりも、  
システム開発の上流の理解に力を注ぎ  
ました。ここでいう「上流」とは開発の  
前提となる経営ビジョンや経営計画に  
関する領域です。そのため授業に企業  
経営者が招かれ、自社に導入したシス  
テムに関する解説を受けたことは、とて  
も有益でした。

講師だった経営者が語ったのは、シ  
ステム導入の意義。それは開発現場が  
腐心する「どのようなシステムを開発す  
るか」の前に位置づけられる、「何のた  
めにシステムを導入するか」という経営  
課題です。それを語る経営者の言葉に  
より、システム開発に向けた私の目は、  
小さな一部分しか見ていなかったこと  
に気づきました。

PBLでは、実在するクリニックの業務  
改善を促す概念データモデルを作成し  
ました。オーナーの考えや医療現場の  
声を1列目、開発から実装までを2列目  
とするなら、システム設計は1.5列目。2  
年次に進級するタイミングで資格を取  
得できた中小企業診断士は1列目と関  
わりが深く、私の実務経験は2列目の  
端にあります。それらをつなぐ1.5列目  
を理解することで、入学時に望んだシ

ステム開発の全貌を視野に収めること  
ができると考えたのです。実際、PBLを  
進めていく過程で、中小企業診断士に  
なるための勉強と実務経験との間に感  
じていた溝が次第に埋まっていく感覚  
を得ることができました。

## AIITで得た知見が開拓した 独立後の新たな実績

AIITを修了して6年後、会社を退職  
し個人事業主として独立しました。独  
立後は、かつて籍を置いた会社にシス  
テムエンジニアとして関わる仕事と、中  
小企業診断士としての仕事がちょうど  
半々くらいの割合です。それらの仕事  
で、AIITで学んだことを直接活かす機  
会は正直ありません。しかし縁あって  
開拓できた独立行政法人との仕事は、  
AIITで得た知見なしには引き受けるこ  
とができなかったものであり、私の新た  
な実績となりそうです。

## 開発現場での発想の殻を破り 経営者の思考に視線を届かせる

情報アーキテクチャ専攻 2012年修了  
駒澤大学 出身





## PBLで経験した“貴重な失敗”を糧に 休眠させていた会社を再起業

情報アーキテクチャ専攻 2018年修了  
東京学芸大学 出身

### 会社を休眠させた 原因を補う学び直し

かつて立ち上げたまま、休眠させている会社を持っていました。これを再稼働させようと、AIITで学びました。雇用保険の給付制度である教育訓練給付制度を活用するため、就学期間は正規の2年。学びに集中するため、Webプログラマーとして働いていた会社を辞めて、定時に退社できる職場に移り、学び直しの環境を整えました。

起業した会社を休眠させた理由は様々ですが、要約すればアンドロイド・アプリを開発したいという思いのみで起業したものの、事業を継続させるための知識と体制が不十分だったと自己分析しています。そこで最新の情報・通信技術をキャッチアップしながら、プロジェクトマネジメントなどを学ぼうと情報アーキテクチャ専攻に進学。同コースで企画や財務、ビジネスやサービス

の設計に特化したストラテジスト(グローバルスペシャリスト)コースを選択しました。

### 結実しなかった 2つのプロジェクト

入学後は企業戦略や財務、法律の授業などを履修。著作権や意匠に関する法律を学んだことは、会社を再興させて以降、心強い知識となりました。

2年次には、コースの延長にあるPBLを選択。途上国の貧困層に向けた経済振興施策の提言をテーマとするPBLで、私は中小企業を活性化させる人材育成と、アジアの貧困農村を支援する2つのテーマに取り組みました。

前者では、中国人留学生が母国の中小企業支援策を考案するためのサポートに徹しました。日本の元気な中小企業へのヒアリングを設定するため、私がいわば“飛び込み営業”をして、「下町ロケット」で知られる会社への橋渡しをしました。

私にとってメインのテーマは、アジアの貧困農村支援です。クラウドファンディングにより農作物の拡販を図ることが目的でした。しかし、このプロジェクトが頓挫し、急遽、国内の農業支援を対象を切り替えました。

新たなプロジェクトは、広島県にある農業高校の生徒が生産する乳製品やパン、精肉などのクラウドファンディングを活用した販路拡大です。学校はもちろん、地元企業とも連携。私も広島に足を運び、プロジェクトを進めました。資金調達の窓口となるWebサイトを設計するなど、担当した作業は先行させていたものの、結果的にはこれも実行には至りませんでした。

### PBLでの課題を 再起業した会社で継続

結果としてはPBLで十分な成果を得ることができませんでしたが、失敗から学んだことはたくさんあります。私はこれを糧として、自身の会社を再起業しました。中核とする事業も当初の計画を変更し、クラウドファンディングを促進するアンドロイド・アプリの開発を目指すなど、PBLでの取り組みを継承することにしました。プログラミングの技術だけで起業した最初の起業時と異なり、今回は企画や財務管理の知識というもう一つの足場があります。さらに一緒に学んだ仲間という人的財産もできました。その仲間とは、修了後も毎月のように夢工房<sup>※</sup>で会い、事業のアイデアを語り合っています。

<sup>※</sup>夢工房(東京夢工房)…大型モニター等が設置されたミーティングスペースと、3Dプリンター、レーザー加工機等が設置されたワークスペース。



アンドロイドアップ合同会社 代表 茂木 真さん



株式会社 豊和ソフト 代表取締役 倪 永華さん



## ワンランク上の 技術系経営者を目指して

AIITで学び、経営者として一回り大きくなれたことを実感しています。

中国でソフトウェア開発を学び来日。その後AIITで学ぶまで約15年、日本のIT分野でキャリアを重ねてきました。その間に同僚と会社を立ち上げましたが、さまざまな面で行き詰まりを感じるように。それは日本人とのコミュニケーションの問題であったり、営業面での不調であったり。技術面でも急速な進歩に追いつけていませんでした。中国で学んだソフトウェア開発はDOS環境によるもの。当時はWebもなく、通信系を学んだ経験ありません。インターネットの活用が前提となる時代に、Webや通信について十分な知識を持っていないことは、弱みであると自覚しました。

AIITに入学したのは、知人の推薦があったから。日本で知り合った同郷の経営者にビジネスを展開していく上での課題を打ち明けたところ、彼は自身が卒業したAIITでの学び直しを勧めました。調べてみると、働きながら学べる環境や制度が整っています。しかも公立。中国人の感覚では、公立学校は教育の信頼性が高く、上位に位置づけら

れるのです。そこで私は、技術系の経営者としてワンランク上に立つため、AIITで最新の情報技術を系統立てて学ぶことを決めました。

## 興味ある分野を伸ばし 弱みを克服する

入学後は、自身の興味ある分野と弱みとされる分野を意識的に学びました。興味ある分野とは、主にコミュニケーションに関することとプロジェクトマネジメント(PM)。弱みは通信系の技術です。これらをバランスよく学び、興味ある分野は自身の強みとし、弱みは克服できるように、それぞれの知識を身につけていきました。

特にPMについては、PBLもこれをテーマとするチームに参加し、幅広い年齢層の日本人と、仮想プロジェクトの立ち上げから終結までを体験しました。各フェーズで求められるドキュメントを作成しつつ、一連の流れをシミュレーションし、PMの仕事を通り学びました。プロジェクトを進めるためのコミュニケーションを体得できたことも、私には大きな収穫でした。用いられる言葉や表現から、その背景にある本意を読み解けるようになったのも、PBLでのグループワークがトレーニングになっ

たと思います。また、PMの視点で仕事を見られるようになった結果、かつては目の前の業務で対立しがちだった品質・コスト・納期の管理が一体として捉えられるようになりました。

## 意思を経営に生かすため 代表を務める会社を起業

学んだ知識に確信を持った私は、経営者に自分の意思をより反映したいと考えるようになり、修了から3年後、自身が代表取締役を務める会社を立ち上げました。顧客や従業員とのコミュニケーションを促進し、人の輪を大切にすることを経営の柱とした会社は、売り上げを順調に伸ばしています。

その結果、想定以上に忙しくなり、一緒に学んだ同期生やAIIT出身の経営者の集まりに顔を出せないことが新たな悩みに。今後は仕事の形態を工夫するなどして時間をつくり、皆さんと交流したいと考えています。

相反していたコスト・納期・品質が  
PMを学び一体として管理可能に

情報アーキテクチャ専攻 2012年修了  
天津大学 出身



## 一人では到達し得ないレベルに達する チームによる開発をPBLで体験

情報アーキテクチャ専攻 2013年修了  
大阪市立大学 出身

### 蓄積された断片的な知識を整理しマッピングしたい

AIITに入学したときは、海外製オープンソースソフトウェア(OSS)のコンサルティングをしていました。顧客の要望に応じてシステムを設計し、機能の追加を含めてソフトウェアをカスタマイズします。これを導入し、その後のサポートまでを担当していました。OSSについてはもちろん、ネットワークやデータベース、プログラミングなど、求められる知識は多岐にわたります。しかし、それぞれの専門性は高くとも、蓄積される知識は断片的。今後のキャリアを考えたとき、一度それらを整理し、自分の中でマッピングするべきであると考えました。

また、広範な仕事に携わる中で、職種により身につける技術を限定せず、例えばプログラマーであってもプロジェクトマネジメントの手法を理解できていなければいけないと思うようになりました。AIITの存在を知り、入学を決めたのはその頃のことです。

### PBLのものづくりを仕事でも再現するため転職

入学して1年間学び、当初の目標はおおよそ達成できました。そして2年次のPBLが、その後の私のキャリアを大きく変えることになりました。

PBLでは「少人数での迅速な開発」をテーマに、1つのWebサービスと2つのiPhoneアプリを開発しました。ソフトウェア開発に迅速さを求められたのは、初めての経験でした。また、専らB to Bの分野でキャリアを重ねてきたため、SNSで情報を発信し、そのフィードバックを次の開発に取り込むという、個人ユーザーを想定した開発も初体験。何より、システム設計からサポートまで幅広く対応してきた私には、チームによるゼロからのものづくりが新鮮でした。時には、自分を抑えこまなければいけない場面もありましたが、一方で仲間の長所を見つけ、それを活かそうと意識するようにもなりました。仕事もそうありたいと考えた私はチームによる開発現場を求め、修了と前後して転職をします。

転職先に選んだのは、オムニチャンネルをテーマに事業を展開する企業。そ

こでの業務はPBLそのものといえ、メンバーが個々の特徴を活かし、役割に応じシステム開発に貢献しました。意見が分かれることもありますが、ディスカッションの場でそれぞれの立場や考え方を互いに明らかにし、着地点を探ることもPBLで経験済みです。

チームによるものづくりは、一人では到達し得ないレベルに達する可能性を秘めています。その醍醐味を教えてくれたのがPBLでした。

### 修了後も交流が続く 教授が語った起業の魅力

こうして理想的な仕事環境を得たのですが、転職して3年後、私は知人と会社を立ち上げました。それは、修了後も交流が続いた教授の仲介によるものでした。教授が語って聞かせてくれた、起業の魅力に惹かれたのです。

立ち上げた会社のスタッフは、私を含め2名ですから、まだチーム体制どころではありません。一日も早く会社を軌道に乗せることが現在の目標です。将来、プロジェクトと一緒に遂行する仲間が集まったときも、私は一人の開発者でありたいと考えています。



学び直し後  
Case  
起業

コンサルティング会社  
ファブレスメーカー 代表取締役 森 憲朗さん



## 多様な人が集まる場で 他流試合に挑む

日系及び外資系メーカーで長年、プロダクトデザインを担当してきました。AIITに入学したのは、インハウスデザイナーとして培ってきた力を“外の世界”で試してみたくなったからでした。

学生の8割を社会人が占めるAIITには、年齢や職業、学び直しの理由や出自などバックグラウンドが異なる様々な人が集まります。そうした人々に対し、自分の言葉をぶつけたり、逆にここに来なければ出会うことがなかった人の考えに耳を傾けたりする中で、デザイナーとしての力量を測り、さらにはデザインが持つ力の可能性を探ろうと考えました。

グループワークを取り入れた授業が多く、チームでプロジェクトに取り組むPBLが必修科目として設定されているカリキュラムは、“他流試合”に挑むには格好の場でした。在学中の機会を最大化しようと、情報アーキテクチャ専攻にもつながりを求めました。また、多忙な業務と両立を図るために選択した3年間の長期履修は、翌年の入学者とも学ぶことになり、出会いの機会を増やしてくれました。

## 未知の経験と 出会いを求めて自ら動く

入学後に履修したのは、経営者の発想や思考の理解につながったり、未知の領域に関わることの出来る科目。同じ基準で選んだのが、東南アジア諸国に人材育成策を提言するPBLです。外資系メーカーにいた私も、国家レベルの国際協力プロジェクトは未経験です。また、創造技術専攻と情報アーキテクチャ専攻の学生が協働するPBLであったことも、これを選択した理由でした。

PBLで構築した提言は後日、国際研究機関に報告しました。その際、担当教授の計らいにより、私がプレゼンテーションをするという貴重な経験も加わりました。

## 課程を修了した後も続く AIITや人とのつながり

修了後、AIITで出会った仲間とチームを組み、ロシアのデザイン・コンペティションに応募。2年連続で最優秀賞と優秀賞を受賞しました。そのチームは、AIITの中で自然発生的につながっていった者同士の集まりです。

当初、国内のコンペに出品した段階では形を成していないアイデアレベル

のプロダクトでした。そこで手応えを感じた私たちは素材や工法を吟味し、より具体化する議論を重ね、形あるものとして完成させたのです。各専攻を修了した後の話ですから、私たちはすでにAIITの学生ではありませんでしたが、引き続きここが活動の拠点でした。

私たちが協働してつくりあげ、「KOMOREBI」と名づけた世界最薄の鉄製のバスケットは、その後も品質を高めています。そして、私がチームメンバーの一部と起業した会社が、世界に広める役割を担い、国内外で開催されるインテリア系の展示会などに出席しています。

また、この会社はデザインの力で経営を促進するコンサルティングも展開。そこではAIITでの議論を通して培った、専門用語を使わないプレゼンテーション力を発揮しています。AIITで学び直し、私は協働する仲間と共に、提案するデザイナーとしての新たな力と目標を手に入れました。

## 自然発生的につながった仲間と プロダクトチームや会社を結成

創造技術専攻 2013年修了  
武蔵野美術大学 出身

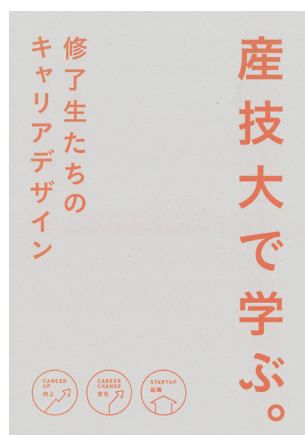


ビジネスの第一線で活躍する修了生たちの、生の声を集めた  
「産技大で学ぶ。修了生たちのキャリアデザイン」  
も発行しています。

「産技大で学ぶ。修了生たちのキャリアデザイン」  
に登場するのは、下記3カテゴリーの修了生です。



事務室窓口にて配布中



本学ホームページでもご覧いただけます → <https://aiit.ac.jp/>